

V 尼崎市戸ノ内での聞き取り

■ 1.

この節は、文学部地理学教室 1999 年度春季の戸ノ内巡検用に事前に収集した資料から用意したものを転載した。またこの戸ノ内に関して使用した地図は以下に掲げたが、96 頁以降にまとめて掲載している。

- ①《地形図－戸ノ内 1909 年》 ②《地形図－戸ノ内 1921 年》 ③《地形図－戸ノ内 1929 年》 ④《地形図－戸ノ内 1952 年》 ⑤《地形図－戸ノ内 1996 年》
⑥《住宅地図－戸ノ内 1959 年》 ⑦《住宅地図－戸ノ内 1970 年》 ⑧《住宅地図－戸ノ内 1980 年》 ⑨《住宅地図－戸ノ内 1986 年》 ⑩《住宅地図－戸ノ内 1996 年》

戸ノ内の沿革

地形図①～④でかつて猪名川と神崎川の合流地点の北、猪名川と濠川の間位置していたが、猪名川改修工事により流路が変わり、かつての猪名川西岸から現在では猪名川東岸となった。戸ノ内は、武士の居住地を意味する「殿内」が転化したものと考えられている。最近まで、「殿ノ内」という小字が残っていた。

1889 年（明治 22）以降は園田村，1947 年（昭和 22）以降は尼崎市の大字となった。1961 年の町名改正，1966 年の土地区画整理と 1971 年の住居表示により戸ノ内町と東園田町の一部となったほか，一部が弥生ヶ丘町となった。

出稼ぎ出身者について

第一次大戦後に砂糖による特需にみまわれた。しかし，ヨーロッパ市場の復興により 1920 年後半からの価格の急落や，その後の恐慌，昭和初期の金融恐慌，更に世界大恐慌により破局をむかえることとなった。

こうした不況下にあえぐ沖縄県民は，「口べらし」や借金返済の手段として，出稼ぎ労働者として子供を県外へ出した。特に，製糸・紡績の女工として集められた女子労働者はその半数近くを占めていた。戸ノ内に住む女性の沖縄出身者の多くが，紡績女工，カーボン工場の女工として戦前に沖縄を離れてきた人たちである。

1931，32 年ごろ当時の川辺郡園田村戸ノ内の神崎川と猪名川が合流する河川敷に，大阪の西成で米屋をしていた沖縄本島北部の本部村出身の男性が養鶏をするために住みついたことから，同じ村の出身者が集まって，小さな集落ができあがった。そのうちに，川向の西淀川の福崎（どこか？）で「素灰（練炭の材料）焼」や火ダネ用のけし炭を作って生活していた別の沖縄人グループが，公害の高周辺住民から追われるように移ってきた。そして沖縄人集落の浜西が形成されたという。

1937年ごろには沖繩県人も増え、職業も炭焼きや養鶏だけでなく養豚を始めるものや、会社員、商業への進出など多様になってきた。そのうちに他府県出身者も合流するようになったようである。

戦後まもなく、現在の浜西の土地を一括で購入し、さらに会館前の広場650坪を、広場の片隅にあるお稲荷さんの祠を祀ることを条件に譲ってもらい、運動場として利用するに至った。さらに、1964年には、月掛けで貯えてきた貯金をもとに、廃材を集めた福祉会館を独自で建設したのである。この地域に住む人たちが、冠婚葬祭や県人の集会、そして琉球舞踊やサンシン（三味線）などの練習の場として利用する為に、各世帯ごと月100円の貯金を積み立てた。そして、小学校の古校舎の廃材をもらい受け、沖繩出身の大工さんを中心に多くの労力提供によって完成した。

工場跡地の利用について

1896（明治29）年山岡順太郎・滝内竹男らによって大阪に資本金100万円の「尾新輪紡績（株）」が設立された。1917（大正6）年には700万円に増資し、1923年に園田村戸ノ内に工場を設立した。

第二次大戦時の空襲により被災した跡地が嶋田、巫、山口の3氏によって買収された。区画整理をしたあと、特飲街化を反対する山口氏が手を引き、1954年尾崎市の中心部にあった売春宿をなくすため、行政指導により難波新地の特飲業者たちが区画整理された宅地の一部に移転し、神崎新地として開業した。この地域が暴力団の温床の地となり、環境が悪化し出した。1971年12月11日の『サンケイ新聞』によれば、「当時、市には売春取締り条例があり、市中心部の売春取締りを強化しながら一方で売春の新設営業を認め、その後なんらの対策もたてなかった」という。

1956（昭和31）年に売春防止法が成立されたが、その後も売春は続けられ、1967（昭和42）年に風俗営業が戸ノ内地区では許可されなくなり、廃業して空家・貸工場となった。しかし、なおも売春・暴力問題が残った。売春防止法の施行された時点で、行政の指導、従業員の変更対策などが十分なされたとはいえず、自力更正する人が残る結果となった。

101頁に掲載した住宅地図の⑥に示されている1959年は、この特飲街の誕生後の状況を表しているが、小字の四王田、中ノ割、島開、長割に新地「らしい」店舗名が集中して見られる。売春防止法が施行されて以降の状況は住宅地図では追えないが、1970年の⑦の住宅地図では、空家が目立ち、一部工場が進出していることが読み取れるが、1980年の⑧の住宅地図では、空家もほぼなくなり、工場が大幅に増加したことがうかがえる。

同和問題

もともと旧戸ノ内村には被差別部落はなかった。高度経済成長下における急速な部落の再編成が、尾崎周辺においても進行してきた。都市周辺部落への人口の流入、人口の増加である。減反政策やエネルギーの転換に伴う炭鉱の閉山、閉鉱により「村」を追われた多くの部落の人々が戸ノ内に移住することを余儀なくされた。戸ノ内地区の出生地をみると兵庫県以外の人々が63.3%（1975年実態調査）にも達している。地方の部落から都市部に流入した部落の人々が自ら部落民と宣言し、同盟支部を結成して活動するようになった。

1970（昭和45）年に発生した尾崎北署の差別事件を契機として、9月に解放同盟支部がつくられた。そ

の前で奏したため、「御前風節」という別名がある。「御前風節」は本来 5 曲から成るが、くだけた座では 3 曲くらいを演奏する。沖縄ではもともと、三味線を弾き歌うのは士族の青年で、平民は出来なかった。

「恩納節」は、恩納岳を中心にした雄大な自然の環境にはぐくまれて育った恩納なべが、情熱燃えるような恋を自由奔放に歌ったのがこの節の起こりであるが、他の地域の美しい景色の歌や恋歌なども含まれている。恩納なべは、平民の女性で字が書けなかったのが、彼女が歌っているのを聞いて書かれた物である。

ところで、沖縄の女性の名前には、なべ、かま、うし等生活に結び付く名前が多いという。

続いて、玉城流・金城康子琉舞の会の潮平博之氏による沖縄舞踊の披露で、「前之浜節」と「鳩間節」を踊っていただいた。舞踊もまた、元は士族の子弟にのみ許されたもので、踊り奉行、三味線奉行もあった。しかし、廃藩置県の時に「田舎落ち」出来なかった士族が踊りを教えるようになり、女性が習い始めた。

歌は、本土では五七調だが、沖縄では八六調である。また、八六調と五七調の混ざった中風というものもある。

そして、ゴーヤーチャンプルやサーターアンダギー、豚肉や昆布を多く使った料理など、沖縄家庭料理をいいただきながら、浦崎見氏、仲地義慶氏、戸ノ内公民館長の辰飯行氏、大庄南公民館の西阪満氏のお話を伺った。

沖縄人の長寿の秘訣は豚肉と昆布にあるという。豚肉は頭からしっぽまで食べる。しかし私が数人の女性にしっぽの食べ方を聞いたところ誰も知らなかった。昆布は沖縄にはない物で北海道産である。これは昔、船で沖縄産の黒砂糖を弾に持って行っていたのだが、たまたま、隣に昆布を積んだ北海道の船が泊まっており、互いに余った品物を物々交換したのが始まりという。さらに沖縄の人は北海道から得た昆布を中国へと運んだりもした。

沖縄の人たちが戸ノ内に来たのは、昭和 5~6 年頃からで、大阪や和歌山に比べるとかなり遅い。当時、「金があれば海外へ、学問のためには東京へ、貧乏で働かなければならない者は大阪へ」と言われていた。海外移民するには多額の渡航費が必要であった。移民できたのは、田畑を売ったり、質に入れたり、ウェーキヤー(富農)から金を借りたり、模合いを落したりして旅費が作れる人たちであった。本土や大阪への出稼ぎが、移民とほぼ時を同じくして始まった所以も、この事と深く関わっている。移民するための渡航費を稼ぐために来阪した者、渡航費が用意できないでそれより少ない旅費で行ける本土への出稼ぎの道を選んだ人も少なくなかった。本格的な集団出稼ぎが始まったのは、大正中期以降である。それには、大戦景気で急激に生産活動を拡大し、求人合戦を繰り広げていた大阪の経済情勢と、戦後恐慌や自然災害で不況のどん底にあり、現金収入になる仕事一つとしてなかった沖縄の経済情勢が密接に絡んでいた。

昭和 9 年には、戸ノ内の 4、5 丁目は河川敷や野原で、家は 10 軒ほどしかなかった。昭和 30 年以降新しい町が出来、旧村と新村に分かれた。現在では約 350 世帯があり、その 3 分の 1 が沖縄県人会に入っているという。

戸ノ内には「から消し」の伝統がある。から消しは木炭の前身で家庭燃料の元祖である。最初は、警察官が失業し流木を焼いてから消しを作り始めた。戦中には、物価統制令が敷かれたが、から消しは除外品で自由に生産、販売が出来た。原料は川に流れている箱や下駄だったが、それだけでは不足するようになり、大阪の木造船の沈んで使えない物や木造建築の焼けた柱などを買ってきた。そして、から消し作り

が広がり戸内に沖縄の人が集まった。最初は和歌山や大阪の紡績工場で働いていたが、求人紙には朝鮮人、琉球人お断りという但し書きがあったため、沖縄の人は独立を目指した。

老人クラブの方々から戸内の歴史について説明していただいた後、互いに一人ずつ自己紹介し、カラオケ大会となった。そして、第二老人クラブ副会長の金城富子さんの閉会のことばのあと、全員でカチャーシーを踊り、今後の交流を約束して会はお開きとなった。

(山川真貴子)



交流会当日の様様

はしゃりだった。そういう感じだった。

川水を防ぐ土手があって、土手に沿って10数軒しかなかった。今は350軒になっている。昭和40年から45年には700軒の時があった。人口は多かったし、特にアパートがものすごくあった。狭いところで肩寄せ合って暮らしていた。とにかく低家賃求めてたくさん入ってきた。

毛紡工場は戦争に入って軍需工場に変わって、昭和12、3年になくなったと思う。毛紡から織紡になって、3年で国際航空になって飛行機のエンジンを作っていた。

毛紡橋は会社が作った。遊郭が尼崎の駅前にあったが、軍需工場の跡地に移転してきて遊郭になった。地元の人は反対したが行政の方針だった。

旧村と新しく来た人では、生活に格差があって、土地との折り合いがつかなかった。差別があった。生活上無理もない。土地に従わなあかん。だけど、従うことができないこともある。旧村から外れた空地进行、県人会で2400坪も買って、地域の心の拠り所としてこの会館ができた。戸ノ内は尼崎の北海道と言われる。

父親は昭和9年に戸ノ内に来たが、出てくる前、易者に「そっちの方向行ったらいけません」って言われていたそうだ。その昭和9年に洪水があった。屋根の戸まで水につかっていた。たらいにのせられて、川のまる草が壁についてた。それだけ覚えてる。3歳の時の記憶だが覚えてる。戦争で(?)、大阪の小学校に逃げておにぎりや沢庵食べた。川から砂を汲み出して砂山作った。雨のようにさーと焼夷弾が降ってきた。夜が昼になる。1メートルおきに焼夷弾落ちてきた。最初防空壕は6畳くらいで過ごした。残ったのは、こっちで仲地さんとことお龍荷さんと1軒だけ。防空壕の木材は毛紡紡績の反物ひろげる3~4メートルの板、反物の張り板を使った。その後山に疎開して炭焼きして、戦後(昭和20年12月)こっちに来た。小学校6年生で帰ってきた。

たまたま土地の有力者に知り合いになった。電柱は自分でたてた。それまでは石油ランプだった。川の中に家を建てたようなもので、ものすごい洪水があれば、木材は流されるし、家は流される。結局国が河川工事をやった。高射砲陣地跡に人が住み始めた。沖縄県人会の代表者が話し合って土地を一括購入した。2代3代と代が変わって土地が売買されて、今は県人の人が3分の1おるかおらんかという感じである。沖縄の人はそれ以上いると思うが県人会に入っていない人もいる。戸ノ内の市営団地に入るためによそからきた親子世帯が増えた。その中で流れてであるが、社会連絡協議会が新村と旧村の2つに分かれた。ここにはもともと被差別部落はなかったが、一部の人が入ってきてここは部落民差別あったことやと言われて旧村とは分かれた。新しく開発されたところはくつつけられた。旧村と新村の違い知らないのとためである。

新村は内地の人でも新しい人が入った。私は旧村の人でもよく知っている。同じ小学校に通っていたからだ。自分たちは数少ない元からここにいた1人なので、このことずっと知っている、初めてきたのはおやじで、カラケシをやって、戦争中山で炭を焼いていた。カラケシから高級な炭を焼くようになった。麩船を漬して炭を焼いていた。皆、薪を拾ったり、コークスを拾ったりして生活していた。炭は生活必需品だった。朝行くと朝食の準備のけむりが立っていた。サンマ焼くのも表に出てバタバタと属いた。隣近所の人のおかずはすぐわかったものだ。

ちよっと皮肉な言い方が、県人会館は伝統文化を楽しみに集う場所のように思う。音楽習ったおかげで沖縄のことは理解できる。仕事は喜びでないとした。惚れた仕事やからやっていける。自分の生きる

道を持っている人は生き延びられる。耐えていける。おもしろくないと続かない。楽しいという気持ちで仕事せねばだめだ。

「はイーがてお経」「まのやま」「まのやまの神 007」

② Eさん

大正13年2月17日生まれ(76歳)。義務教育卒業の15歳の時に、和歌山の北島紡績に就職。家族が多いから、すぐ紡績に働きに来た。兄弟12人の長女。集団で募集されて、皆と来た。東も西も分かんけど、先輩がいたから助けてもらっていた。可愛がってもらっていた。けれども職場に行ったら、最初は見習いで、養成の時、先輩について機械の前で仕事していたけど、きつい人からは「いつまで覚えへんの」ときつく言われたりした。早く覚えないとだめだと思った。機械は20時間回っているのでも、お手洗いやも行けない。先輩に「見てもらってな」と頼んでいける時はいいけど、知らない先輩に当たる時もある。我慢できなくて大変だった。

2交替だったので、寄宿舎に帰ってくるのは朝の時と晩の時があった。寄宿舎の部屋に帰った時はほっとした。田舎から出ていったら最低2年は辛抱するように皆言われていた。お金を借りて仕度してきたからだが、体を悪くして入院してしまった。胃を悪くしていた。親に手紙を出したら、「帰っておいで」と言われたので、2年6ヵ月で帰った。

寮生活が一番の生きがかった。部屋では6~7人、7~8人の集団で入っていた。休みの日は部屋長さんのカードにいつの何時に外出すると印鑑押して外出した。今何ていうのか、ホルモン、もつなべを食べるのそれは楽しみで、5~6人で食べに行った。1週間に1回の休みにもつなべを食べるのが楽しみだった。そして部屋に帰ってきたらどんちゃん騒ぎ。歌ったり踊ったり、台を逆さにして叩いていたら、隣の部屋の子も寄ってくる。20人くらい寄って来た。皆同じ里から来た人達だった。1年に1回演芸大会があった。

職場は戦争と一緒にだった。綿から糸になるまでに切れる。機械に巻き込んで切れる。綿を取って糸にせんと、部長さんがまわってきて怒られる。工場に行ったら戦争だった。どういことがあっても機械は止められなかった。

雪を見るのが初めてで、洗面器を持って外へ出て、雪だるまを作った。あの頃は11月から雪が降っていた。

その時は辛いこともあったけど、今になってみれば悪い思い出はなくていい思い出が残っている。私のことを好きな子が、直接はよう言えずに、おかしを買ってきて名前を書いて、「あの子好き」と他の子に仲を持って貰って渡してきた。部屋に泊まりにきたりした。可愛い人だった。引き上げる時すごく悲しかった。

毎月給料は1円20銭。弟の弟が小学6年生の時、先生が家に訪ねてきて親に、「中学校行かせてくれ」と頼んだけど、親は、「とんでもない。貧乏の子が行かされへん」と一旦は断った。弟は中学受験を一発で通った。中学2年から3年に上がる時、予科練(特攻隊)に行った。赤とんぼに乗って体で当たっていくところだったけど、終戦になった。あと1ヶ月太平洋戦争が延びたら出るところだったけど行かず済んだ。その弟の学費の為に毎月7円送っていた。着物も買えなかった。先輩のお姉さんが「お古でよかったら」と言ってくれた。そのお姉さんは今も92才でご健在で、会社と一緒にやったから今だにかわいがってくれる。会社では部屋が隣の隣だった。

病気で沖縄に戻って2年いた。家はクリーニング屋だった。昭和16年12月8日に太平洋戦争が始まった。昭和17年、最後の集団募集で滋賀県に行った。膳所で働いていた。寒いところだった。お父さんは行ったらあかんといってたが、戦争で物が無い時だった。腹いっぱい食べたくて出てきた。でも、膳所に来た時、お茶碗にどの位と分量決まっていたので、すぐお腹がすいたものだった。同じ寮の人が田舎に帰ると、柿などの果物やおにぎりを持って帰る人がいたけど、押し入れや観音開きに首を突っ込んで食べて、分けてくれなかった。それも慣れたけど。

昭和17年の9月に膳所の工場やめて、飛行機の部品つくる工場に行った。そこには1年ちよつといた。1年3ヶ月いた。

友達が結婚して戸ノ内にいたので、昭和18年に手紙を出したら夫婦で迎えに来てくれた。外出許可がなかったら出られなかったけど、その時は自分が部屋長だったので逃げられた。こっちに逃げてきて友達の方に1ヶ月あまり泊めてもらって仕事を探した。終戦まで加島にある大阪機工(今の福山製紙のところ)の食堂に勤めた。寮生活。腹いっぱいご飯が食べられた。休みの前におにぎり作ってこっそり持って帰って友達にあげた。腹一杯食べられるところならどこでもよかった。

そこで終戦迎えて寮長さんが、「行けるとこに行きなさい」ということで、また友達のところに行って、次は闇商売を始めた。そして昭和21年3月3日に紹介されて結婚した。

4人の男の子に恵まれた。夫が亡くなってこの5月8日で8年になる。「旦那おってみいや、こんなんきにできへん」。26歳の孫がいる。食べてからお風呂に入りに来る。夜勤している。「おばあちゃん遅いけど、よく遊びに行ってる」と言われる。

「人生は楽しく。真面目じゃなかったらあかん。昔の人はそういう人が多かった。嫁さんらとは仲いい。老いては子に従えや。子供らに嫌われたら自分が損する」。

この地区は、これからの開発にかかっている。

③ Fさん

家族で昭和26年に出てきて、こっちで生活して、50年近くこっちで仕事ばかりしていた。おもちゃ、動力ミシンや食堂などといろいろ働いていた。看護婦の経験もある。区画整理で団地がなくなる。

(松井美枝)

■ 4.

以下の叙述は、交流会の当日、第1老人クラブ会長の浦崎さんが準備して全員の配布した「2000年初春交流会」と銘打った資料集を一部転載したものである。

戸ノ内における沖縄県人について

■沖縄の人たちが戸ノ内に来たのは、昭和5~6年頃からで、大阪や和歌山に比べるとかなり遅い。

①沖縄の那覇港を出港した船は、神戸港に入港し沖縄から来た人たちは大阪や和歌山へと向かった。

明治 12 年に貨物船が大阪～那覇間を就航するようになって、沖縄と大阪を結ぶパイプが着実に太くなり、明治 30 年後半になると、大阪への出稼ぎの記録も散見されるようになる。文献資料等には、明治 33 年 33 人の県人男子が職工として大阪鉄工所に就職したことや、大阪商人の下請けの県人行商人が黒糖・泡盛の販売や耕・上布等の行商をして大阪に住み着くようになったことが記されている。(雄飛 大阪の沖縄)

②出稼ぎを目的に、自由意志による本土への出稼ぎが断続的に行われたのは、海外移民が相次くようになった明治 30 年代後半である。

沖縄は、海外移民の最も盛んな県の一つで、ハワイ・米国本土・ブラジル・ペルー・アルゼンチン等々に多くの県人が移民している。

その要因として、一般には土地が狭小で資源に乏しく、人口が過密であるうえに、明治・大正年間における政治的・経済的要因による農村社会の窮乏があげられている。そして、移民問題の研究家の間ではその背景として王朝時代から、国内資源の貧困を克服するために海外発展を図って来た歴史的経過があるとの指摘がある。(雄飛 大阪の沖縄)

③「錦を着て故郷に帰る」

在伯 50 年史にも「当初の移民は、新天地を求めて旅立ったのではなくその夢は錦衣帰郷、極端に言えば、お金を儲けて故郷に帰ることであった」と述べている。

④「金があれば海外へ、学問のためには東京へ、貧乏で働かなければならない者は大阪へ」
海外移民するには多額の渡航費が必要であった。移民できたのは、田畑を売ったり、質に入れたり、ウエーキヤー(富農)から金を借りたり、模合いを落札したりして旅費がつけられる人たちであった。

本土や大阪への出稼ぎが、移民とほぼ時を同じくして始まった所以も、このことと深くかかわっている。移民するために渡航費を稼ぐために来阪した者、渡航費が用意できないでそれより少ない旅費で行ける本土への出稼ぎの道を選んだ人たちも少なくなかった。

本格的な集団出稼ぎが始まったのは、大正中期以降である。それには、大戦景気で急激に生産活動を拡大し、求人合戦を繰り広げていた大阪の経済情勢と戦後恐慌や自然災害で不況のどん底にあり、現金収入になる仕事一つとしてなかった沖縄の経済事情が密接にからんでいた。

⑤「親孝行の証し」
大正中期以降、生産活動を拡大していた本土業者(特に紡績会社)の周旋人が、戦後恐慌でソツツ地獄の窮状にあった沖縄へ、労働力を求めて次々と海を渡って来た。

周旋人たちの多くは、本土各地の紡績会社と契約し、農村地帯の子女のいる家々を訪問し、親を口説いた。「紡績に行くとき座っていても金儲けができる・新しい着物が着れる・親への仕送りができる等々」と甘い言葉や嘘八百を並べて口説き、少ない前渡金を渡して娘を紡績工場に連れていった。

貧しさから抜け出し、家族の生活を支えるために、女学校に進学する者以外の農村の若い娘たちの多くが紡績に行った。当時の社会ムードも、それが親孝行の証しにもなっていた。

●本土の出稼ぎ地

沖縄からの本土出稼ぎ労働者の大部分は、工場が集中している阪神・中京・京浜・北九州の四大工業地帯や綿糸紡績工場地帯に集中していた。大正 14 年の沖縄県警察部保安課調査では、本土出稼ぎ労働者の総数は 19,926 人となっている。

圧倒的に多いのは大阪の 8,533 人で全体の 43% も占めており、以下神奈川 14%、静岡 6%、東京 5%、福岡 5% の順になっている。

女子労働者についても大阪が 3,824 人 (35%) と最も多い。大阪の男女比は 55 対 45 と拮抗しているので、当時の出稼ぎ先は男女とも大阪が主軸となっていた。

●出稼ぎ者の出身地

次に、本土出稼ぎ労働者は、沖縄県のどの市町村から流出していたのか。このことについて、昭和 10 年 12 月末現在の県外在住者調べ（沖縄県）がある。今帰仁村で 1,395 人で県全体 15,648 人の 8.9% とトップを占め、本部町、那覇市、羽地村、粟国村と続く。

★初めて本土に出てくるものは、決まって同村の先輩知人を頼って行くために、先発の出稼ぎ者が集中していた大阪の大正、港、西成区などに必然として集まった。和歌山や岸和田、堺なども、大正の末期には紡績工場の女工や男工、あるいはその関係者などが住みついている。兵庫県の場合はかなり出遅れるが、それでも紡績など工場労働者が住みつき始めたのを嚆矢とする、といっている。

★昭和 5、6 年頃、大阪の西成で米屋をしていた本部出身の具志堅興保は、養鶏をするための場所を探していたところ、たまたま戸ノ内の河川敷を見つけた。まだちゃんとした堤防もなく、川原は広々として養鶏場をつくるのに最適である。さっそく一区画を占拠して掘って小屋を建て、小規模ながら養鶏を始めたところ、同じ本部出身の岸本恵徳、仲本兼富らもやって来て、小さな集落をつくっていった。

★その頃、すでに川向かいの西淀川の福崎（どこか？）では、中頭出身の喜納、崎本部出身の仲地文永、山川宗助、金城吉三郎たちが「秦灰焼」や「から消し」をつくっていた。

仲地、山川らは大正の末期、和歌山の紡績工場に就職したあと、独立をめざした人たちであった。ところが、今でいう公害であろうか、周辺住民の苦情がだんだん高まってきたため、移転せざるを得なくなった。そこで、今では水中に埋没してしまっているのだが、三角州の先端・福崎（どこか？）にひっこしてきたのだという。

同じように、これらの先輩を頼って崎山本部出身の人たちがポツポツ移住してくるようになり、その二つのグループが集落を結成したのが、今日の浜西というわけである（「ここに榕樹あり」）

★戸ノ内親友会ができたのは昭和の 12 年ころで、会長は古川電工に勤めていた桑江良孝だった。その頃になると県人も増えていて、職業もから消し焼きや養鶏だけでなく、養豚を始めるところがあり、会社員や商業への進出など多様になっていた。また、沖縄県人だけではなく、他府県出身者も入り込んで混然

『京中・鹿野宗茂の「中慶地獄」』、加藤隆十の著述を引用した本報の記事

★しかし、「から消しの戸ノ内」の伝統は生きていて、戦時中は鹿船を解体、その鹿材をそのまま薪として馬車に積み込み、大阪や尼崎の工場に売り出した。また、から消しだけでは儲からないというので、川べりに炭焼き窯をつくり、鹿材で炭を焼いて燃料の不足時代には重宝がられたという。この炭焼き窯は、終戦後も一時期は大いに威力を発揮、戸ノ内の沖縄出身者の生活を支えてきている。ちなみに、現在の戸ノ内在住の沖縄出身者は350から400世帯、約1500人である（1982年）。

★敗戦と同時に、工場は当然のことながら規模を縮小せざるを得なくなる。そこで真っ先に「人員整理」の対象とされたのが、沖縄女子挺身隊員だったのである。「寮を出て欲しい」と通告され、途方にくれた少女たちは、尼崎市内に住む県人に泣きついた。その少女たちの救援のために、砂川忠智、金城亀吉、大城盛通といった人たちが中心となって、ともかく尼崎沖縄県人会の名で旗揚げ、会社側と交渉して寮を出るまでに猶予期間をおくことで話し合いがついた。

★昭和21年1月、GHQ、日本と南西諸島の行政分離を宣言。『考案』、おのまるとう出版
帰るべき故郷を失った戸ノ内の県人は尼崎沖縄県人会の園田支部を結成し、浜西に第二の故郷を築くことを決め、会員の意思統一を図り、西宮在住の大地主山崎某と交渉して土地2400坪を坪100円で一括購入することで話がまとまった。

★このとき、大西万次郎戸ノ内沖縄県人会長と安谷屋剛仁副会長は、事情を地主の山崎氏に訴えて、広場に隣にあったお稲荷さんを県人会でお祀りするというので、広場650坪の無償提供を受けた。

■ 5 .

戸ノ内を紹介した新聞記事から 『考案』、おのまるとう出版
神戸新聞 1973(昭和48)年11月29日～12月2日、4日～6日まで7回に分けて「陸の孤島 尼崎・戸ノ内からの報告」と題して、連載記事があった。

- 1回目：日雇い労働者Aさん 重労働で体にガタ 高度成長のカゲに泣く 『考案』、おのまるとう出版
- 2回目：意志の統一 生きるのに精一杯 よりそい住む沖縄県人 『考案』、おのまるとう出版
- 3回目：押しつけられた売春街 “差別” が新天地生む 断てぬ根元 “暴力団” 『考案』、おのまるとう出版
- 4回目：たった一つの診療所 ほしい入院ベッド 6割が “健康注意者” 『考案』、おのまるとう出版
- 5回目：足りない公共施設 安全な遊び場造れ 悲し無い無いずくし 『考案』、おのまるとう出版
- 6回目：自覚とあきらめ 人情豊か協力心も 頼れぬ行政が “団結通無生む” 『考案』、おのまるとう出版
- 7回目：三つの条件 住民主役の開発を 意見、要望を十分くめ 『考案』、おのまるとう出版

このうち、1回目と2回目の記事の要約を掲載する。

<陸の孤島 尼崎戸ノ内からの報告 (1)>

橋を越えると、大阪、豊中にはいる。尼崎市東北端にある戸ノ内地区。猪名川の中洲として土地形成され、戦中、戦後を通じて四国、九州から流入した労働者、沖縄出身者、村と呼ばれていた時代からの住民が立ち遅れた都市環境の中で暮している。行政投資が進められず、一部は過密住宅地区を形成。衛生、防災、福祉と多種多様な問題をかかえている。いわゆる赤線地帯「神崎新地」が作られ、地域の代名詞とされた時代も。再開発のプロジェクトチームもできたが、住民には一種のニヒリズムとやり場のない怒りがうずまく。住みよい町という市の掛け声がうつろひびくが。

戸ノ内町 5 丁目に当たる浜西地区は、細い路地をはさんで老朽化した共同住宅、木造文化、町工場が軒を接している。四つ角の水銀灯は割れたまま、アパートの壁に打ち付けられたトタン板が、寂びて、いまにも止めクギから落ちそう。浜西は市内でも一、二の密集地帯。地区の実態調査をした大阪市大の三輪嘉男助教授は、ここでは貧困が大きな問題になっていると述べる。ある日雇労働者は腰痛と肝臓を悪くして、失業中、4 年前に東淀川から転入した。親方が地区に住み、仕事の連絡に便利。安いアパートを親方に紹介された。ここには同じ親方の下で働く仲間が 5 人もいる。

園田福祉事務所の話では、他の地区と違って、申請の 99% が保護適用を受け、それは病気、仕事にあふれた、蒸発といったことですぐ貧困世帯に落ち込む、ボーダーライン層が多い。2 年前の保護世帯調査では 145 世帯で 7.0%、今年は 159 世帯で 7.6% にアップし、市内平均の 2.3% を大きく上回っている。日雇い、大工手伝い、内職、無職で 92%、保護開始理由は疾病、世帯主老齢、母子家庭で 87%。

地区の人口は約 1 万人、3000 世帯、39ha で、人口密度は 2.5 万人と非常に高い。零細ながら堅実に事業を続けている工場経営者、商店主、中小会社の社員、旧村時代からの地主も数少なくないが、親会社がつぶれたり、病気で、あすから仕事にあふれる日雇い、手伝い、パートが多いのも事実…。

安い市営住宅を建てて欲しい、失対の仕事を、老人ホーム、公園、公民館がない、あつても要望にほど遠い状態、管理、運営も貧しい。住民は戸ノ内にこそ行政の暖かい手をを差し伸べて欲しいと訴える。

市は戸ノ内地区環境整備計画策定プロジェクトチームを 9 月に発足させたが、住民は取り組みは 20 年遅い、しかも場当たりのやと不満をぶつける。

<陸の孤島 尼崎戸ノ内からの報告 (2)>

浜西に住む B さん (50 才) は、18 才の時沖縄から親類をたよりに戸ノ内に来た。戦争中は堤防の外の砂地で、流木、廃材を焼き、消し炭を作っていた。大雨で水かさが増すと、堤外には防壁がないから、なんべんも炭を焼く窟が流された。出稼ぎのつもりで本土に来たがいい仕事はなかったと当時の苦勞を話す。40 世帯くらいだった。

ここに住もうと思ったのは敗戦からで、アメリカに占領されて行くところがなかったの、ここを第 2 の故郷に。沖縄県人会兵庫県本部の上江洲久会長は、沖縄の問題を抜きにして戸ノ内は語れないという。地区には 600 世帯あり、南部の浜西、浜東に住む人が多い。浜は旧猪名川、藻川に接した地区で、昭和のはじめに沖縄の人が移り住んだところ、ここ 20 数年間、急速に影れ上がった。焦土と化した沖縄から、大阪の恩加島、宝塚の高松、そして戸ノ内などに集まった。尼崎の北海道と呼ばれ、行政の施策が遅れて

いる戸ノ内の川べりになぜ沖縄の人が住まなければならなかったかということをお会長は問うている。

なぜと言う疑問は解きにくい。県人会園田支部長の具志清彦さんは、沖縄の人間は同属意識が強く、見知らぬ土地で暮らすのは不安だから、縁故をたよって寄り集まった。差別され虚げられることが多かったから、寄り集まろうとする意識は他の県人より強い。ある沖縄二世(30才)は、小学校のとき、同級生に、あいつは戸ノ内の沖縄やと言われたと話しているが、そのような共通の体験があったのではなからうか。

部落解放同盟戸ノ内支部も結成されている、昭和46年に戸ノ内同和関係調査報告によると、同和地区ではないが、昭和30年以降集まった同和関係者によって、昭和45年9月に発足。きっかけは同年6月の尼崎北署の売春取締りに関連した差別事件だったが、同盟の久保重蔵さんは、虐げられた人間は、苦しみがわかる仲間がほしいと思う。部落の人間が、全国から集まってきたのは、そこに理由がある。沖縄県人の場合も同じでしょう。戸ノ内は住みやすいところなんですよ。

戸ノ内に集まる理由として、沖縄県人、同和関係者が同属意識、相互理解、援助をあげるのに対し、浜東で小さな旋盤工場を経営している工場主は、大阪や豊中では反対いを受けて、工場などもたれないからこちらに進出したという、神崎新地跡を中心に、小・香細工場、事務所が200軒近く集中し、もとの新地は活気ある工場街に生まれ変わったとみる住民もいる一方で、旋盤の音がうるさい、隣の工場の振動で安眠を妨げられると公害問題が起きている。

ある沖縄県人は、自分の問題を片付けるのに精一杯で、町内、地区全体の問題を考える余裕はなかったと告白する。旧村の人たちは、この数十年間南部へ行ったことはない。紡績工場、売春街、現在の賃貸工場といろんな変化があつたらしいが、自分たちには関係ないものばかりであると突っぱねた意見。戸ノ内は、‘人種’の寄り集まり地区になってしまい、いつまでたっても地域の意思統一はできないという。かつては農村だったが、一部にそののどかな農村地帯の面影があるが、戸ノ内を貧困、売春のイメージでとらえられるのは心外であるとも強調する。

このように住民意識のズレは大きい。

このズレは、市バスの終点の延長問題で、旧村側の早く乗り入れをと、中央部の地区の環境整備が先決ということで、意思統一が取れず、旧村に建設中の園田東会館の一室を解放同盟が使用したいとの申し入れに、旧村は反発といったことで、問題が表面化する。このズレに行政側ものっかり、ここはやっかいなところ、地区の問題であるとしてほおかむりしてきたいきさつがあり、それが今でも続いている。

上江洲会長は、意思統一を図り、協力せねばと呼びかける。町をよくしたでは一致しているので、地区改造計画を検討して行く中で、バラバラの意識を乗り越えていくしかないであろう。

式内 2013年 2月 20日

6. 1909年測図の地形図からみた戸ノ内の形成

1909年測図の地形図からみた戸ノ内の形成

96頁に掲載した①の地形図である1909年測図の2万分の1地図からは、猪名川、藤川、神崎川の合流点の戸ノ内の状況が見て取れるが、旧集落の南側は、築堤に取り囲まれた一面の田圃と、築堤の外側の河川敷にかなり広大な荒地の存在することが明瞭に見て取れる、明らかに人家は存在していない。旧集落

から南にのびる道路は、猪名川で渡し船を利用して加島にわたっていたようである。現在のモスリン橋の位置にそれはちょうど当たる。また対岸の加島にも工場進出はまだみられない。のどかな近郊の田園風景である。

それから12年後である1921年の②の地形図は、戸ノ内の北半分が掲載されていないが、加島の渡しの存在が確認されるが、戸ノ内自体はほとんど変化を見せなかったと思われる。わずか8年後の1929年の地形図を見ると、1925年進出のモスリン工場が旧村南部の築堤内部の敷地を全面的に買収して、巨大な工場本屋と付随する社宅地区を登場させている。火力発電所もあわせて建設されたようである。戸ノ内の周辺地区にも数多くの工場進出が見られるが、地区自体での面的な市街地形形成はほとんどみられず、田園地帯に工場がぽかっと存在するという構図が見て取れる。河川敷については、改修工事が行なわれたのかどうかは不明であるが、神崎川左岸の河川敷で、モスリン大橋の南詰めに家屋が、さらに下流に1921年にも既にその存在が確認される大阪血清養院獣医師の建物が見られるくらいで、基本的に無利用の河川敷だったことが読み取れる。聞取りなどではちょうどこの地図が作成されたころに、養鶏を始めた沖縄出身者がこのへんに住みついたことになっており、事実関係は符号する。

戦後については1952年現在の④の地形図では、いまだモスリン工場が存在しているかのように記されているが、時期からして特設街として区画整理される以前の未利用状態であったと思われる。河川敷については、堤防に取り込まれ、浜西などが成立し、家屋もいくつかみられるようになる。特にモスリン大橋以東の旧河川敷にかなりの家屋の集中も見られる。以降住宅地図でその後の変化を追ってみるが、⑥の1959年時点での、川側の小字神崎川縁ではかなりの民家や店舗、作業所が進出し、沖縄出身者の表札名も数多く見られる。13年後の1970年の⑦住宅地図では、旧河川敷の様相は激変する。住宅地図上では、モスリン大橋の東が東浜、西が西浜という小字名がついている。特に浜西と呼ばれる西浜では、狭小住宅が集中して進出したことが判明する。この状況は⑧住宅地図の1980年でも変わらない。大きな変化は1986年の⑨住宅地図にあらわれるが、3棟の市営浜西団地が登場し同時に浜西地区で空地が登場してくる。1996年の⑩住宅地図では8棟に増えており、空地となる街区も増えている。

河川工事や住宅改良事業のプロセスの解明については今後の課題としておく。

予： (水内俊雄)

行方不明な半島は半島、この島は河川敷の本山の築堤の島の中、1951。この島は河川敷の島の中、1951。この島は河川敷の島の中、1951。

7. 沖縄県と野球は近年関わり合いが深くなってきている。プロ野球のチームは沖縄県のいたるところでキャンプを張る。2000年であれば、名護市に日本ハムファイターズ、沖縄市に広島東洋カープ、北谷町に中日ドラゴンズ、宜野湾市に横浜ベイスターズ、浦添市にヤクルトスワローズ、宮古島にオリックスブルーウェーブといった具合である。一方、沖縄で野球といえば、1999年の選抜高校野球大会で沖縄尚学高

校が優勝したが、これは沖縄勢としては春夏通じて初の快挙であった。全国高等学校野球選手権大会（以下、選手権大会）の起源は1915年にまで遡ることができる。当時は全国中等学校優勝野球大会といい、大阪府の豊中球場で始まったが、第3回大会から会場が兵庫県鳴尾球場へ移り、さらに1924年の甲子園球場の開設と同時に会場も甲子園球場へ移った。沖縄県は1922年から地方大会に参加しているが、戦前はついに一度も甲子園に足を踏み入れることはなかった。

第二次世界大戦後、沖縄は米軍の統治下におかれ、地方大会への出場も1952年まで許されなかった。沖縄は1952年から地方大会に参加したが、地区代表権を宮崎県代表および鹿児島県代表と争わねばならず、甲子園出場がはばまれてきた。そのようななかで、沖縄勢が初めて全国大会に出場したのは、1958年の第40回大会である。この年は記念大会で、46都道府県に沖縄代表を加えた計47校が出場することとなった。この年の沖縄代表は首里高校で、1回戦で福井県代表の敦賀高校と戦い、0-3で敗れた。記念大会において沖縄勢は年を追うごとに活躍をみせ、第45回大会で首里高校が春夏通じて沖縄勢初勝利をあげ、第50回大会で興南高校がベスト4にまで勝ち進んだ。沖縄勢の甲子園初出場はかなったものの、記念大会以外は相変わらず地区代表権を争わねばならなかった。

沖縄は1972年に日本本土に復帰し、沖縄県となった。これを記念して、組み合わせ抽選くじ順にかかわらず沖縄県代表・名護高校の主将が選手宣誓を行った。1975年からは沖縄県に甲子園出場の特が与えられ、これ以降、毎年沖縄県から必ず一校出場できるようになった。

甲子園出場すらままならなかった沖縄勢であったが、徐々に活躍をみせはじめ、豊見城高校が第58回大会から3年連続でベスト8になり、さらに沖縄水産高校が第72回大会から2年連続で決勝に勝ち進んだ。沖縄水産高校は両年とも決勝で涙を飲んだが、沖縄勢は着実に力をつけていっているといえよう。

選抜高校野球大会

「春のセンバツ」として親しまれている選抜高校野球大会（以下、選抜大会）は1924年から選抜中等学校野球大会として開催された。1924年は名古屋の山本球場で開かれたが、翌年からは甲子園球場で行われるようになった。沖縄勢で選抜大会に初出場したのは、第32回大会の那覇高校である。なおこの年を含めて、沖縄本土復帰にあたる1972年まで沖縄から甲子園に出場した年は、すべて沖縄枠が設けられており、沖縄から必ず出場することができた。1976年からは豊見城高校が春夏合わせて6大会連続出場した。しかし、春の大会の戦績は夏の大会に比べてよくない。1998年までの成績は選手権大会が43勝31敗と6割近い勝率をあげているのに対し、選抜大会では1998年時点で5勝21敗と勝率が2割にも満たなかった。沖縄は常夏の気候であるのに対し、春先の甲子園はまだ寒く、体調をくずしてしまうのではないだろうか。そのようななか、1999年の第71回大会で沖縄尚学高校が優勝をとり、紫紺の優勝旗を手にした。春夏通じて優勝旗を沖縄県へもたらしたのは、これが最初である。

沖縄における現在の高校野球事情

選抜大会における沖縄尚学高校の優勝により、沖縄県における高校野球の水準の高さが全国に知られた。ところで最近の高校野球界では沖縄がブームになっているという。ここでは1999年5月18日朝日新聞夕刊に掲載された記事をもとに、沖縄県における現在の高校野球事情を載せる。1999年から「温暖な地で実戦的な練習を」との呼びかけのもと、「海邦リーグ」が開かれるようになった。この呼びかけに応じて、沖縄県外から北照（北海道）、関西（岡山県）、広島電機大付属（広島県）、藤嶺藤沢（神奈川県）、土浦日大（茨城県）の五校が参加し、地元からは沖縄水産、沖縄尚学など13校が加わった。選手強化には県外交流が欠かせないが、その最大の障壁は遠征費である。このような事情に対して、地元企業は「甲子園での活躍は県民の願い」と支援している。那覇市に本社のある日本トランスオーシャン航空は、県高野連がチームを派遣する場合には協賛企業として運賃を無料にしている。また県外校が遠征にきた場合には、多くの旅館は宿泊費を一泊三食で4,000円から6,000円に割引する。また沖縄へ来る遠征校には、県高野連が「球児に沖縄の歴史を理解して欲しい」と、戦跡をたどることを勧めている。

戸ノ内と高校野球

『高校野球甲子園出場校事典』を編集した森岡（1998）は刊行にあたって以下のように記述している。

「甲子園」が、他のスポーツのような単純な高校生 No.1 を決める大会ではなく、地域の代表としての性格を帯びていることを見逃すわけにはいかない。母校が出場したときはもちろん、小さな市町村では地元の学校が代表になると、町を挙げて応援を行う。…戦後、人の動きが激しくなり、現在では出身地と居住地は異なることが多い。しかし、それにもかかわらず、或いはそれだからこそ、郷土代表にあつい声援をおくる。首都圏や関西圏に住む多くの人は、地元の学校ではなく、出身地の高校を応援、母校が活躍すれば、甲子園まで応援に駆けつけることも珍しくはない」（森岡、1998、p.1）。

戸ノ内はまさにこのような地域にあてはまる。戸ノ内は甲子園球場に近いこともあり、沖縄県から甲子園に出場する場合には必ずといっていいほど応援に駆けつける。また戸ノ内にある沖縄県人会園田会館には大会に出場した沖縄県代表校の写真が掲げられている。園田会館は以前沖縄水産高校が大会に出場した時に、二軍が宿泊したところでもある。

沖縄県人会に限らず、県人会という組織はその性質からして当然のことながら郷土意識が強い。全国規模の高校野球はそのような郷土意識が強くあらわれるイベントであり、甲子園球場はそれが象徴される場所である。高校野球を通して県人会のコミュニティをみる、あるいは県人会を通して高校野球のあり方をみるというのも興味深いテーマではないだろうか。

参考文献

森岡 浩（1998）編：『高校野球甲子園出場校事典』東京堂出版、p.355。

1999年5月18日朝日新聞夕刊

朝日新聞社編（1999）：『全国高等学校野球選手権大会史（第71～80回）』朝日新聞社・日本高等学校野球連盟、p.605。

（坂井康広）

表 沖縄の甲子園大会出場校

		選抜高校野球大会				全国高等学校野球選手権大会						
年	回	代表校	勝数	負数	備考	地方大会	回	代表校	勝数	負数	備考	地方大会
1915							1					
1916							2					
1917							3					
1918							4	米騒動のため中止				
1919							5					
1920							6					
1921							7					
1922							8	—				九州
1923							9	—				九州
1924	1						10	—				九州
1925	2						11	—				南九州
1926	3						12	—				南九州
1927	4						13	—				南九州
1928	5						14	—				南九州
1929	6						15	—				南九州
1930	7						16	—				南九州
1931	8						17	—				南九州
1932	9						18	—				南九州
1933	10						19	—				南九州
1934	11						20	—				南九州
1935	12						21	—				南九州
1936	13						22	—				南九州
1937	14						23	—				南九州
1938	15						24	—				南九州
1939	16						25	—				南九州
1940	17						26	—				南九州
1941	18						27	予選途中で中止				南九州
1942		第二次世界大戦のため中断						第二次世界大戦のため中断				
1943		同上						同上				
1944		同上						同上				
1945		同上						同上				
1946		未開催					28					
1947	19						29					
1948	20						30					
1949	21						31					
1950	22						32					
1951	23						33					
1952	24						34	—				東九州
1953	25						35	—				東九州
1954	26						36	—				東九州
1955	27						37	—				東九州
1956	28						38	—				東九州
1957	29						39	—				東九州
1958	30						40	首里	0	1		記念大会
1959	31						41	—				南九州
1960	32	那覇	0	1		沖縄 1	42	—				南九州
1961	33						43	—				南九州
1962	34						44	沖縄	0	1		南九州
1963	35	首里	0	1		沖縄 1	45	首里	1	1		記念大会
1964	36						46	—				南九州
1965	37	コザ	0	1		沖縄 1	47	—				南九州

1966	38				48	興南	0	1	南九州		
1967	39				49	—			南九州		
1968	40	沖繩	0	1	沖繩 1	50	興南	4	1 ベスト4		
1969	41	首里	0	1	沖繩 1	51	—		南九州		
1970	42	真和志	0	1	沖繩 1	52	—		南九州		
1971	43	普天間	1	1	沖繩 1	53	—		南九州		
1972	44	名護	0	1	沖繩 1	54	名護	0	1		
1973	45	前原	0	1	九州 4	55	前原	0	1		
1974	46	—			九州 4	56	—		記念大会		
1975	47	豊見城	2	1 ベスト8	九州 4	57	石川	1	1		
1976	48	豊見城	0	1	九州 3	58	豊見城	2	1 ベスト8		
1977	49	豊見城	1	1	九州 4	59	豊見城	2	1 ベスト8		
1978	50	豊見城	0	1	九州 4	60	豊見城	2	1 ベスト8		
1979	51	—			九州 3	61	中部工	0	1		
1980	52	—			九州 4	62	興南	2	1 ベスト8		
1981	53	興南	0	1	九州 4	63	興南	0	1		
1982	54	—			九州 3	64	興南	2	1		
1983	55	興南	0	1	九州 4	65	興南	1	1		
1984	56	—			九州 4	66	沖繩水産	1	1		
1985	57	—			九州 4	67	沖繩水産	2	1		
1986	58	沖繩水産	0	1	九州 4	68	沖繩水産	2	1 ベスト8		
1987	59	—			九州 4	69	沖繩水産	1	1		
1988	60	—			九州 4	70	沖繩水産	4	1 ベスト4		
1989	61	—			九州 4	71	石川	0	1		
1990	62	—			九州 4	72	沖繩水産	5	1 準優勝		
1991	63	—			九州 4	73	沖繩水産	5	1 準優勝		
1992	64	読谷	0	1	九州 4	74	沖繩尚学	1	1		
1993	65	—			九州 4	75	浦添商	0	1		
1994	66	那覇尚	0	1	九州 4	76	那覇尚	1	1		
1995	67	—			九州 4	77	沖繩水産	0	1		
1996	68	沖繩水産	1	1	九州 4	78	前原	0	1		
1997	69	浦添商	0	1	九州 4	79	浦添商	4	1 ベスト4		
1998	70	沖繩水産	0	1	九州 4	80	沖繩水産	0	1		
1999	71	沖繩尚学	5	0 優勝	九州 4	81	沖繩尚学	1	1		
通算					10	21	通算			44	32

1946年以前はそれぞれ選抜中等学校野球大会、全国中等学校優勝野球大会。

第8～10回優勝野球大会の九州大会の区割りは、福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県。

第11～27回優勝野球大会の南九州大会の区割りは、熊本県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県。

第34～39回選手権大会の東九州大会、および第41回選手権大会の南九州大会の区割りは、宮崎県、鹿児島県、沖縄。

第42～56回選手権大会の南九州大会の区割りは、宮崎県、沖縄もしくは沖縄県。ただし、記念大会は除く。

第45回以降の選抜高校野球大会の九州大会の区割りは、福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県。
選抜高校野球大会地方大会の後ろの数字は、甲子園出場枠数。

出典：『全国高等学校野球選手権大会史(第71～80回)』および新聞記事などにより作成。